「聖アルバンズの書」覚え書

杉瀬　祐

1．関心の所在

The Boke of St. Albans の初版は，1486年に London 郊外の St. Albans において，the schoolmaster of St. Albans の名のもとに出版された。

第2版は，それから10年後の1496年に Westminster において，Wynkyn de Worde の名のもとに出版されている。

初版本は，Hawkynge, Huntynge, Lynage of Coote, Armiris, and Blasyng of Armys の5つの表題をもつ treatise が収められ，その第2の treatise の colophon に 'Explicit Dame Julians Barnes in her boke of huntyng' と出ていて，hunting の部分は Juliana Berners の筆になるものと，従来考えられていた（"Of these only that on hunting is now believed to have been entirely written by her." The Encyclopedia Americana, 1960）。

第2版には，さらに The Treatyse of Fysshynge wyth an Angle が追加されて，前述のように10年後に Wynkyn de Worde によって Westminster で出版された。そしてこの treatise の筆者も Dame Juliana Berners と信じられて来たのであって，こうして Dame Juliana Berners の名は現存するイギリス釣り文学古典の最古の文献の執筆者として輝いているわけである。

ところが異論がないわけではない。第2版の colophon には 'Explicit dame Julians Bernes doctryne in her boke of huntynge' と記されて 'the Boke' は終り，'Enprynted at Westmestre by Wynkyn the Worde the yere of thyncarnacon of our lorde, m.cccc. Ixxxxvj.' と記されているところから William Blades は，Wynkyn de Worde が hunting の部分のみを Juliana Berners の執筆によるものと限定している，のは明らかではないかと主張するのである。[1]

また，'the Blasynge of Armys' の終りの colophon に 'Here now endyth the boke of blasynge of armys translatyd and compylyt togedyr at Seynt albons' とあるところから，その底本の詮索がなされ，その原本はフランス語の著作ではなかろうかという意見は当時の両国の関係や社会情勢からして当然強くあった。それだけでなく，フランス語からの翻訳は the boke of blasynage of armys だけでなく，The Boke of St. Albans 全体が翻訳ではないのか，さらには第2版に附加された the treatyse of Fysshynge wyth an Angle も翻訳ではなかろうか，などの疑問も提出された。殊に最後の問題は，かの有名な木版画（挿絵参照）をめぐって，その原画はドイツにあるとか，14世紀まで遡る古い木版画であるとか，論議は喧しく，*The Boke of St. Albans* の初版・第2版のルーツ探求の熱気は一時に吹き出した感があった。

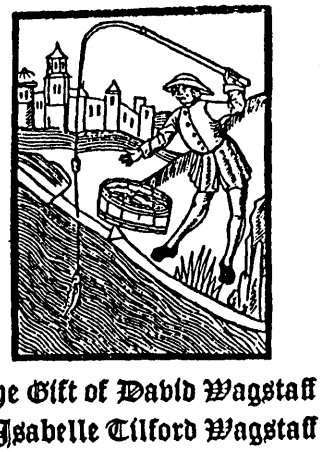
①

②

Frontispiece to Original Edition.
1496

③

④



挿絵説明

①The John Rylands Library 所蔵の1496年版の貴重な版本の最初の頁。原本は1420年までさかのぼりうると考えられている。木版画のみは一般によく知られているが，活字に囲まれた original のものは珍らしい。

②Willian Van Wyck 版（1933年）のもの。1496年の Frontispiece to Original Edition と記されているが，どこの原本からとられたものかは記載がない。

③William Pickering 版（1827年）のもの。①とよく似ているが，部分的に少し異る。①に手を入れて新しく綺麗に仕上げたものであろうか。Geo. W. Van Siclen 編集の An American Edition（1875年）は，この Pickering 版を再録したものであるが，彼は "I have reproduced the elegant illustrations which (I believe) adorned the first edition. The earliest print from a wood engraving of which any information can be obtained, was found in an ancient German convent : it is a picture of St. Christopher, and is dated 1423 ; in 1496 this book was first "emprynted" : I think it quite possible that this old frontispiece represented St. Peter : it is certainly quite as good a likeness of him as I have ever seen." と記しているが，聖ペテロまでゆくのは少し行き過ぎのようにも感じられるものの，しかし竿と糸と釣と浮子木とシズとを使っての釣りというのは，確かに漁撈文化（Pisciculture）史上，画期的な黎明であったのである。

④Yale 大学の釣文学関係蔵書中の Wagstaff 夫妻記念図書の蔵書票。これは①と大変よく似ている。尚，Harvard 大学にも Yale 大学に勝る尨大な釣文学関係の蔵書があり，John Bartlett, Daniel B. Fearing などの記念寄贈図書があり，Princeton 大学もまた多くの Pisciculture 蔵書を誇っている。

ところが 'After full consideration, Haslewood finally attributes to the dame's pen (1) a small portion of the treatise on Hawking ; (2) the whole treatise upon Hunting ; (3) a short list of the beasts of chase ; (4) another short one of beasts and fowls. "It is plain Julyans Berners wrote the book of Hunting" (Herbert and Dibdin's *Ames,* ii, 65, 1810)' (DNB. M. G. W.) と結論的な口調で語られたのである。けれども，この意見にはその論拠となるものが明示されていないし，承服しかねる点も多く，その後も論議は引き続いて絶えることがない，というのが客観的な今日の状況と言うべきであろう。

The Boke of St. Albans の初版本と第 2 版本に関する論議については，以下に触れてゆくわけであるが，この *The Boke of St. Albans* はその当時の類似の諸本を凌いで非常な人気であった本で，16世紀には幾度も再版され，イギリス國民の中に広く浸透したのである。有名な L. M. (Leonard Mascall) の *'A Booke of Fishing with Hooke and Line, and of all other instruments thereunto belonging.'* (1590) や William Gryndall の *'Hawking, Hunting, Fowling, and Fishing with the true measures of blowing.'* (1596) や *'A Jewell for Gentrie.'* (1614) なども，すべてこの *The Boke of St. Albans* に依拠したものである。また16世紀にはこの本のフランス語の部分訳が出された[2]と伝えられている。

Izaak Walton の *'The Compleat Angler ; or, the contemplative man's recreation'*, 1653, 第 5 版 Charles Cotton との合冊 1676, や Thomas Barker の *'Barker's Delight ; or, The Art of Angling.'* 1653,[3] 改訂増補版1657 などにも *The Boke of St. Albans* の Juliana Berners 筆と伝えられる文章，特に毛鉤の項に関しては殆んどそのままに引用されていることから考えると，*The Boke of St. Albans* は古典と言うよりも源流と呼ばれるにふさわしいものであると言うことができるであろう。

The Boke of St. Albans の初版本（1486年）に関しては，William Blades が序言を付して facsimile として1884年に出版したものが著名である。第 2 版本，1496年の第 4 部に関しては（1486年の初版には 5 つの treatise が出ているが，主なものは 3 つなので，3 部に分けられるのが通例である），T. Westwood & T. Satchell の *Bibliotheca Piscatoria*, 1901，を見ると21種類の版本があることが報告されている。[4] 私が所有し，この小論のための底本として用いたものは末尾の Bibliography にあげておいたように，そのうちの 4 種類の版本にすぎない。

わが国では *The Boke of St. Albans* の所在そのものすら話題に上ることも少いように思われるし，関係文献も少いように思う。*The Boke of St. Albans* に関する研究についても，その論議は学者間にあってかなりの相違がある。前述のように，不明なところ，現在論争されているところなど，いろいろ多くの問題を含んでいるが，この小論は，それら先人の研究のあとを辿り，少しでも正しく理解・消化して整理してみようとの試みである。十分な資料に恵まれていない現状の中で先人の業績を越えるということはとてもできないことではあるが，整理してゆくなかであるいは新しい問題点や研究の方向が示唆されるということもあり得るのではなかろうか，と考える次第である。

以上の如き状況の中で *The Boke of St. Albans* に関する問題点，あるいは関心の所在は，

1．イギリスの印刷・出版史上から，William Caxton, Wynkyn de Worde と初版本の印刷者 The Schoolmaster of St. Albans との関係。The Schoolmaster of St. Albans とは一体何者であったのか。

2．Dame Juliana Berners に関しての著者問題。

3．内容および原本問題。

4．その他，ノルマン・フランス語と英語との関係や St. Albans を中心としての John Wycliffe（1324？～84）らの宗教改革前夜史や，あるいはイギリスの中世からルネッサンス時代へと移行してゆく中での文化や人間の問題が考えられるであろう。特に，上記のような社会的文化的背景の中でやがて抬頭してくるゼントリー階級と遊びとの哲学の問題は重要な考察のテーマとなるべきものであろう。

2．原本，MS.

Geo. W. Van Siclen は，“1496年に印刷された one of the original copies を見つけたが，これは買うとしたら $2,500から $3,000はしただろう。1827年の Baskerville edition は $82の相場であった。”と1875年の段階で記しているが，[5] 彼が発見した1496年印刷の原本というのは果して何であったのかは不明である。

Thomas Satchell が1883年に出版した *“An older form of the Treatyse of Fysshynge wyth an Angle”* は Alfred Denison 所有のものに基づいて校訂出版されたものである。その序文に，

“This tract is printed from a manuscript written on five sheets of paper folded in quarto form. The leaves have been slightly cut and now measure seven and a half inches by five and a half. The paper is water-marked with a hand or glove, to the middle finger of which a six pointed star is attached by a short line. Each page contains from 22 to 25 lines closely written in a correspondence hand of the earlier half of the 15th century.”

と T. Satchell は記している。[6] この MS. は1868年11月に Mr. Jesse の蔵書であったものが，45 s. で Mr. Denison の手へと渡ったものである。この MS. に加えられている Mr. Joseph Haslewood 自身の自筆のノートによると，“ここにある20頁のものは15世紀初期の原稿の断片であって，最初に *The Boke of St. Albans* において印刷された “little pamphlet” のかなりの部分をしめていたものである。……(中略)……この断片資料は typographical historian の William Herbert の所有していたもので，彼はその複写を作り，その複写は Townley が所有していたが，原本の方は Herbert から Brand へ，そしてさらに George Isted の所有へと移り，他のあまり大したものではない資料と一緒に C. Lewis によって1823年に製本された。そして，その原本と他の綴りは G. Isted の亡くなる数ケ月前に Joseph Haslewood に寄贈されたものである。”[7] ということである。

上記の文中には1810年に出た reprint 版のことも触れられているのであるが，その1810年の

reprint 版では著者は Dame Juliana Barnes に帰せられている。1810年の reprint 版のことは，*Bibliotheca Piscatoria* には，“150部限定版，A bibliographical labour carefully and conscientiously executed by Mr. Joseph Haslewood，また序文だけ別刷として少数部数印刷されている”（詳細は註 3 を参照されたい）と紹介説明されている。この1810年の reprint 版は，実に1496年から300年以上も経って漸く校訂を施されて久しぶりに復活した最初の reprint 版と言うことができる。[8]

ところで，著名な書誌家であり蒐集家でもある庄司浅水氏の古書こぼれ話（掘出し本）の中に，「聖アルバンズの書」のことが出てくる。[9] これは雑誌「ザ（ママ）・アンティコオリー」創刊号に載った有名な話であるそうだが，1844年 6 月，イギリスのブリトンの町でひとりの屑屋がある後家婆さんから 4 kg ほどの古本を 9 ペンスで買い取った。ところがその中に「聖アルバンズの書」が混じっていて，最終的には70ポンドでトーマス・グレンヴィユ侯の手中に落ちた。わずか30円そこそこで買ったものが，僅かの間に 7 万円にもなったというので，愛書家仲間では当時大変な評判であったということである。その問題の「聖アルバンズの書」は，それから50年程前というから1795年頃のことであろうか，ゲェンズボロ教区のトウノック・ポール文庫の大修理に際して散逸したものらしい。以上の話からだけでは，初版本なのか，第 2 版本なのかもわからず，1486年または1496年の原本とも思えないが，恐らくは第 3 部までの内容の印刷本であっただろうと思われる。

ところで，Thomas Satchell の *“An older Form”* の底本に用いられた Denison 所有の MS. に関しては E. F. Jacob (Professor of Medieval History in the Univ. of Manchester) が次のように批評を加えている。[10]

“But it (the treatyse of fysshynge wyth an angle) is prior to *the Boke of St. Albans*. In its earliest surviving form it— or the greater part of it— is contained in a privately owned manuscript written on five sheets of paper folded in quarto form ; and the paper has a water-mark of a gloved hand, which, along with the character of the script, points to the first half to the fifteenth century as the period of writing. The original extends as far as the instructions on trout fishing, and finishes with the section on the bait to be used in September. When compared with the Treatise as printed in *the Boke of St. Albans* there is, as the editor of the edition of *the Boke* published in 1810 observed, the customary difference of orthography, and there are three instances of variations in the introductory matter : there are also, as the more recent editor of the early fragment has pointed out, various gaps which the Treatyse fills : thus suggesting that what we have called the ‘earliest surviving form’ is not the original, but a copy from a more complete text, from which Wynkyn de Worde printed :

Treatise (before 1420)

MS., in Denison Collection, c. 1420—1450, partial,

Wynkyn de Worde, (entire), 1496

上記の "a privately owned mauuscript written on five sheets of paper folded in quarto form ; and the paper has a water-mark of a gloved hand" というのは，以前 Denison Collection にあった MS. で，後にアメリカに売り渡され，Mr. Murgatroyd の言によれば Mr. David Walker (Tuxedo Park, New York State) の所有に帰していると言われるものである。

さて，E. F. Jacob によれば，現存する最古の写本は15世紀前半に書かれた手袋の透し模様入りの4つ折の5枚の写本であるが，これは完全なものではなく，別に存在する原本から部分的に写されたものにすぎない，完全な原本は Wynkyn de Worde が知っていて，彼はそこから *The Boke of St. Albans* の第2版に追加印刷したのであろうと言うのである。Denison Collection にあった写本とは別の流れのものが Wynkyn de Worde の手中にあり，原本は1420年以前にまで遡る，というわけである。

T. Satchell も彼の *"An Older Form"* の中において次のように述べている。[11]

"The differences between the treatise as given in this MS. and as printed in the *"Book of St. Albans"*, are more important than the above statements wonld lead us to believe. They extend not only to the orthography but equally to the phrase, and in very many places to the sense also. That it is an independent text cannot be doubted, and in this opinion we are supported by the high authority of Rev. Professor Skeat, who is inclined to assign it an earlier date than 1450. Though probably an older form of the treatise printed at Westminster in 1496, it is drawn from the same original, which, wherever it first come from, was at that time written in our language. The close correspondence in many passages forbids the idea that the two versions were independent translations from another tongue. Originally from the French it may have been."

1486年の *The Boke of St. Albans* 初版本の大部分，即ち鷹狩り，狩獵，紋章，などについての treatise がノルマン・フランス語の text (Thomas Satchell によれば Venerie de Twety, New Encyclopedia Britanica 及び E. F. Jacob によれば Anglo-Norman text の Le Art de Venerie を底本としているという）からの翻訳であることは，前にも少し触れたように，従来すでに指摘されてきたところであるが，その正確な部分はどこからどこまでなのか，それよりもっと重大なのは第2版において新しく附加された The Treatyse of Fysshynge も初版の諸論文と同様にフランス語の底本からの翻訳なのか，それともイギリスで最初に書き下ろされた釣り文学なのか，という問題がある。これは熱烈な Waltonian の多いイギリス国民としては，決していい加減にしておくわけにはゆかない重大関心事であり，伝統の源泉に関わる事柄なのである。[12] さらにまた，The Treatyse of Fysshynge は第2版の1496年に新しく書き下ろされたものなのか，それとも Rev. Prof. Skeat や Prof. E. F. Jacob が言うように，それは1420年代にまで遡る古い資料なのか，という問題，そしてまた，その筆者と伝えられている Dame Juliana Berners とは一体何者であったのか，果して実在の人物であったのだろうか，などの問題が起って来る。ある

いはまた，もしそれが1420年代に書かれたものであるとしたら，1420年代の英語はどのような英語であったのか，それは1496年の *The Boke of St. Albans* の第2版にそのまま印刷に付されうるようなものであったのか，という語学的・文化的問題も出てくる。

3. Dame Juliana Berners

Dame Juliana Berners は1388年に生れたと推測されているが没年は不明である。St. Albans の町の近くの Sopwell にある Benedictine Order の尼僧院の副院長（Prioress）の職にあり，古くから The Treatyse of Fysshynge wyth an Angle の著者と伝えられていた。彼女はまた，貴族の出〈a daughter of Sir James Berners of Roding Berners in the county of Essex (a favourite of Richard the Second)〉で，[13] その学識教養も深く，修道の徳も高く，多くの人々に敬愛祝福されていたという。

Dame は婦人に対する敬称であるが，この尊称の用いられた範囲については，学者間にも諸説があって，いまだに定説はないようである。現在の英語式発音ならディム（deim）（岩波及び研究社英語辞典）と呼ぶべきかもしれないが，Oxford Dictionary では dāme となっており，Webster Dictionary では dām となっている。15世紀の当時の語学的状況から考えると，ダーメ，ないしはダームと呼ばれるのが一応妥当なところではないかと愚考するが，これも私の専門外の領域のことであるので，識者の御教示を得たい。因みに，St. Albans も，今日では普通オルバンスとかオールバンズとか呼ばれているが，St. Albanus（聖アルバヌス）（303頃）はイギリス最初の殉教者であり，その彼を記念した修道院及び町であるから，この小論では故意に「聖アルバンスの書」としている。

Juliana Berners についても幾つかの異った表記がある。Sir John Hawkins は Dame Julian de Berners と記している。(Julyans)，Berners (běr'nĕrz)，Bernes (běrnz)，Barnes (bärnz) などがあるが DNB では Juliana Berners としているので，本稿ではそれに従っている。

Juliana Berners の生涯に関しては伝え残されているところは極く僅かであるが，William Blades は前にも少し触れたように，1881年の facsimile 版の序文の中で，従来の Juliana Berners 著者説に対して疑問を投げかけた。その理由は，第1に Sopwell 尼僧院の記録を調べてみても Juliana Berners の名が記録に残っていないという点，第2には Sir Berners の家系の中に Juliana の名は見当らないという点，第3には Dame という呼称は必ずしも高貴な女性に対してのみ用いられる尊称ではなく，当時では一般の主婦その他にも用いられていた普通の呼称ではなかったか，と言う点にある。

これに対して Geo. W. Van. Siclen は，文章の女性的特徴をあげたり，その他の諸点を指摘したりして，女性ジュリアーナ・バーナーズ擁護説をうち出し，W. A. Baillie-Grohmnn (Master of Game を1904年 London で編集再版す）が調停にのり出すなど，結論はいまだ出ていない。

"Explicit Dame Julians Barnes" と *The Boke of St. Albans* にあるのを，Barnes と Berners とを

同一視したのは1700年 Chauncey によって以来のことであるが,[14] 1906年の Blades がこの同一視に疑問を投げかけたのに始って，その疑問は今日もなお続いていると言えよう。A. E. Jacob は The name Bernes, adopted in the *Short Title Catalogue*, was borne by a prominent member of the Mercer's company in the later days Edward Ⅲ. John de Bernes, mayor of London in 1370—1371.……In the first half of the fifteenth century Berney(William) is the name borne by a well-known solicitor, …… some of them notable people like Sir Thomas Colepeper of Sussex. But there is no reason why Berners should be ruled out : in the fifteenth century the names Berners, Bernhous, Bernes, Bernyes differ very little, and the indexers of *the Close Rolls* find it difficult to distinguish between them. と語っているが,[15]A. L. Binns は，Berners という名前は Lincolnshire に多く，もし Juliana Berners が狩獵の部の著者とするならば，Chauncey や Haslewood が指摘したように，Essex よりも Lincolnshire の住人にした方がふさわしい,[16] と語っている。

これらのことは，名前の由来や土地との結びつきの詮索だけでなく，*The Boke of St. Albans* の第1部，第2部，第3部，第4部のそれぞれの内容の詳細な検討とも関連してくる問題である。King Edward Ⅱの狩獵係をしていた Twici のノルマン・フランス語で著した *Le Art de Vénerie le quel Mestre Guyllame Twici, venceur le Roy d' Engletere fist* (ca. 1328) や Edward, second duke of York : *Master of Game* (1406～1413)（これは Gaston Phoebus : *Livre de Chasse* の翻訳であった）や同じく Gaston Phoebus, *comte de Foix : Le Livre du Roy Modus* や *La Grande Chasse* などが，どのような形で，どの程度まで *The Boke of St. Albans* の各部の内容に関係しているのか，という問題と無関係ではない。もし，第1部から第3部までが上記の書物からの翻訳であったり，あるいは翻案（日本の明治初期における黒岩涙香などの換骨奪胎の翻案のようなもの）とするならば，第1部から第3部までの編輯者と第4部の著者とは，別人なのか，それとも同一人物なのか，という問題も起ってくる。また，第4部も翻訳ないしは翻案であるとするならば，その原本は何か，そしてもし，その原本が50年～100年も遡るものであるならば，Juliana Berners の名前の詮索も比較的無意味になってくる。こうした事情があるため，多くの人々がある程度手をつけて探求しながら，それを徹底させず，また断念してしまったと言うこともできるであろう。

狩獵の部では「汝の dame に聴け」という句が繰返されるのに，第4部ではそうした繰返句は全く出て来ず，口調も異っている。1000年頃に書かれたと思われる断片——これは St. Bertins の修道院に属する図書の断片であるが——や修道院長の Aelfric が生徒にラテン語を教えるために用いたと伝えられる *Aelfric's Colloquy*（10世紀の終り頃）のことから考えると,[17] Juliana を Julian にして，Juliana Berners は本当は男性だったのではなかろうか，という一部の臆測も起ってくる背景がある。

しかし，これはあとで再び詳しく触れるであろうが，第4部が女性，殊に尼僧院と深く関わっているという前提で Juliana Berners の問題を考え直してみることも一つの試みではなかろうか。当時の修道院や尼僧院がどのような生活を守り，どんな状況であったのか，をあれこれ

と物語る記録は多い。しかし，ひとつふたつの逸話で全体を推断することはできないし，漠然とした印象で全体像を決めつけてしまうことは厳に慎しむべきことであろう。それに，修道院や尼僧院に住む人々が皆同じ傾向や気質をもっていたわけではなく，それぞれに個性をもち，異った生き方をしていたことも考えられる。だが，われわれにあまり馴染みのない14～15世紀の尼僧院ともなると，われわれの想像や常識（？）を越えた点も出てくる。「イギリスの女子修道院の大多数は，北部，東部およびイングランド東中部地方に見出されるが，それらはほとんどすべて小規模なもので，概してひどく貧しく，大修道院（アビー）ではなく，それに従属する修道院（プライアリー）であった。14世紀から15世紀の間のさまざまな時期における在院者の数を大ざっぱに分析すると，概算が可能な111の修道院のうち，30人以上の在院者がいたのはわずか4，20人から30人が8，10人から20人が36，10人以下が63であったことが分かる。この期間（1350年頃），イギリスには修道女は，あわせても3,500人以上はいなかったはずである。しかもこの数は次第に減少していって，1534年には1,900人に落ち込んだ」[18]のであり，数多くの博学な修道女を輩出し，社会奉仕にも大いに活動した修道院も，中世後期には宗教的，学問的にも衰微退廃し戒律も乱れてゆく。「そうした軽薄さや世俗性の増大するさまは，司教の巡察記録にとどまらず，チョーサーのマダム・エグランティーンの描写にも示されている……世俗の流行の真似事はただ単に服装に限られていたわけではない。愛玩動物もまたそうであった。司教たちはペットを戒律上不適当と見なし，何世紀にもわたって動物を修道院から追い出そうと試みたが，いささかも功を奏さなかった。修道女たちはただ司教が行ってしまうまで待っては，再び犬を呼び戻したのである。犬は手軽にお気に入りのペットになったが，修道女はその他にも，猿やリスや兎や鳥を飼っていた。彼女たちは，時には動物たちを礼拝堂にも一緒に連れていったのである」[19]。こうして16世紀の修道院「廃止」の事態に立ち到るわけだが，女子修道院が後期において堕落の一途を辿り続けたことは事実だとしても，E. E. Power も指摘するように，中世の未婚の上流婦人にとって，修道院はひとつの恵みであり，共同体の運営および家政や所領の管理において彼女たちの能力や組織力を引き出し，訓練し，本人にその気と能力があれば，立派な学問的教養や瞑想的生活をいう最高の経験を与えることのできる場であったのである。

修道院は戒律の生活の場である。規則の殆んどは，ベネディクト会会則に基づいて宗教的かつ規律正しい生活をさせるように作られており，7つの聖務と沈黙と瞑想が課せられていた。

修道院では特に聖金曜日を守って肉食を避け，それに代るものとして魚食を摂る。だが，魚は肉よりもはるかに高価で，貴族の食物とも云うべきものであった。農民は妊婦や病人に魚を食べさせるのがせいぜいであった。「だから農民戦争のなかでミュールハウゼンの農民軍が1525年5月はじめにオルシェルで貴族や修道院の養魚池をかい出し，魚をとって大鍋で煮て食べたとき，彼らの意気はあがったのである。……魚を自由にとることこそ，領主のものとされる森で鹿をとるのと同じように，自由のシンボルであった」（阿部謹也『中世を旅する人々』平凡社　1978，P.73）。修道院は原則的に自給自足の態勢をとり，他方，今日のような流通市場が発達していたわけではないから，修道院では近くの河や湖やあるいは養魚池で鱒その他を捕って来て必要に充てた。しかし，尼僧院となるとことはそう簡単ではなかったであろう。男

子のように子供時代にヤナやかい掘りや釣りをして遊んだという経験も少く，道具の作り方ひとつにしても見当もつかず当惑するといったことも多かったことであろう。そうであれば，専門の職漁者とか経験豊かな上手の者から，いろいろ指導をうけ，それらをひとつひとつ記録にとどめ，それらを後輩が継承してゆく，ということになる。その間に，関連した参考になる知識や技術があれば，それが書物からであろうと伝聞によるものであろうと，伝承されたものにさらに附加されてゆくわけである。こうした中で次第に民俗学的な関心や視点が養われるということは実際にも起ったし，そうした契機を数多く内包していたことであろう。

Geo. W. Van Siclen は次のように記している。[20]

I must confess that I am puzzled a little to account for the lady's knowledge of so practical a sport : and yet, on the Beaverkill, not far from the Willewemoc Club House, in Sullivan Country, N. Y. I have seen a lady fill her creel with the best : so might the old dame and her nuns have done in England just prior to the time when this continent was discovered, and long before the Willewemoc had been heard of.

当時の女性たちの活動状況についてはよく知られているわけではないが，1954年になって初めて陽の目を見た天下の奇書がある。これは1577年に書かれた *The Arte of Augling* という本で，著者名のところの頁が脱落しているために著者不明となっているが，恐らくはプロテスタントの牧師であった William Samuel ではなかろうかと推定されているもので，今日まで約400年もの間，イギリスのあれほど数多くいる蔵書家や好事家たちの誰の目にふれることもなく，また他の本の中で言及されることもなく，ひっそりと眠っていたものが突如として市場に現われたため騒然とした話題となり，その内容も Waltonians には非常に大きな意義をもつものであったが，その世界唯一冊という原本は Carl Otto von Kienbush の入手するところとなり，彼はそれを Princeton 大学図書館に寄贈し，Princeton 大学は早速限定版の facsimile を出版した[21]。前口上が長くなってしまったが，この本の中での主婦の位置や活躍というものは眼を見張らせるものがある。このように自由に生気に満ち溢れた女性たちが，当時の庶民階層の日常的な姿であったならば，Juliana Berners や尼僧たちが裳をからげて釣りをしている様子も想像に難くはないし，ほほえましく活気に溢れたものであったであろう。

4．Caxton, Wynkyn de Worde, Richard Pynson そして the Schoolmaster of St. Albans.

中世をどのように把握するか，中世的人間とはどのような人間像であったのか，そしてまた，特にイギリスのような島国において，中世から近世への移行，それも特に14世紀から15世紀にかけての時代に，人間は何を思念し，どのような情感に生きていたのか，というようなことは，大変興味ある問題であり，最近いろいろの角度から掘り起されている問題であり，わが国においても同様であるが，言うまでもなくこの小論で取上げる範囲を逸脱している大問題でもある。ただ，*The Boke of St. Albans* をめぐってのこの小論に関して述べるならば，印刷や書籍のこと

に限定して考えても，Caxton や Wynkyn de Worde，あるいは Richard Pynson など，その行動半径は意外に広く，知識欲も生活意欲もおどろくほどに旺盛であり，彼らの出版活動はより広い大衆の需要や期待に支えられて初めて発展することができたものであった筈である。Caxton の出版事業が極めて大衆的・世俗的であったということは，当時のイギリス国民，ロンドン市民の動向を示唆している。J. Nordström の言うように，Bruckhardt 的な昏睡した世界，目覚めていない中世ではなく，13世紀頃には既に情熱的に思想や知識を求めてやまぬ気運が漲りあふれ，しかもそれは世俗的な哲学や知識に対して旺盛な関心と食慾を示し，自ら求めているのが何であるのかすらよく判らないような混沌とした状況のままに動き出そうとしていた胎動の時代，と言うことが出来るであろう。Nordström は，南仏の政治的安定から生じた女権の拡張，教養ある女性の出現，そして騎士道的宮廷文化，「それは調和のとれた生を営むこと，祭宴を楽しむように，ただし賢明な節度をもって生活の快楽を享受すること」を目指す優雅・洗練の人間像を生み，少しばかり空想的な実践哲学を生み出した，と指摘する。[22] また，他方では現実的な庶民文学——たとえば *"Fabliau"* や "狐物語" なども生んでいたわけである。当時の時代状況から見れば，いわゆる Norman Conquest から百年戦争，薔薇戦争へと続き，黒死病の流行やロンドンの大火などの多くの出来事が相次いで，イギリスは決して安穏無事な時代を生きぬいてきたわけではないであろうが，われわれが歴史的な諸事件などから想像する以上に，イギリスの庶民は逞しく，また意慾的であったようである。また，イギリスではキリスト教会が国家と結びついた事情が，庶民の一般生活的には幸いな方向に働らいて，Caxton の出版目録などを見ると，そこにはかなり瀆神的・反宗教的なものが見られるにもかかわらず，大陸的な反宗教的世俗主義などとは違った，道徳的・宗教的世俗主義とも言うべきものが育っていった，と言えるのではなかろうか。そして他方では，フランスを中心としてネーデルランドその他との活潑な知的刺戟や交流と，経済的・政治的な盛り上りの気運とは，中世フランスの騎士道的空想性と洗練性，そして平民的現実主義・個人主義とを，ロンドンの City を中心として結合させ，さらに醗酵させていった，と見ることができるであろう。

さて，Caxton に始るイギリスの印刷・出版事情に話を戻すことにしよう。

Johann Gutenberg（1400？—1468）のヨーロッパ世界における鉛鋳造活字による近代的印刷術の画期的な発明（1440年）の意義は改めて言うまでもないことであるが，その印刷技術は，Gutenberg が住んでいたマインツを中心にライン河沿いにたちまち全ドイツに拡がり，1464年にはイタリーのローマに近いスビアコ，1465年にはスイスのバーゼル，1470年にはパリとオランダのユトレヒト，1473年にはハンガリーとスペイン，1476年にはイギリスに，それぞれ最初の印刷機が据えられるに到ったと言う。15世紀中に発行された書籍は約4万種類，1,500万～2,000万冊であろうと推定されている。

William Caxton（1422？—1491）は，イギリス最初の出版印刷業者としてだけでなく，自ら翻訳者として精力的に活躍した。Caxton に関して，「(彼は自分の）仕事の重要性が，教育ある人々のために英語の形式を定めるという点に存することを，よく知っていた」，そして「英語の文語体完成の基礎を築き，次の世紀に英語がおさめた大勝利への道を整えるのに，大いに

貢献した」という点,[23] ヨーロッパ大陸では古典書原本の刊行が新しい印刷機を通して一般的に行われていたのに対して，Caxton は貴族や学者たちに対するよりもむしろ中産階級大衆に目を注いで，たとえば，キケロの著作を印刷する場合でも，わかり易い英語の翻訳で出版したり，自分で翻訳して大衆の興味と実用に応じた『チェスの遊び方』（* *The Game and Playe of the Chesse,* 1475, at Bruges)，その他 * *The Recuyell of the Historyes of Troye* (1475), *Dictes or Sayengis of the Philosophres* (1477, at Westminster), *Book of Courtesy* (1477), *The Canterbury Tales* (1478), * *Reynard the Fox* (1481), * *The Golden Legend* (1483), * *Æsop* (1484), * *The Book of Good Manners* (1487) など,[24] Caxton の出版物一覧を覗いてみても，彼の極めて現実的な，そして実務的な姿勢が明らかに見てとられる。しかも，その多くは Caxton 自身が翻訳し（上記の * 印は Caxton の翻訳によるもの)，イギリス国民共通の新しい英語を育てるためにいろいろ腐心努力しているのである。[25] Caxton はもちろん古典のものも，そしてラテン語の本も印刷出版したが，中産階級大衆の要求しているものを確実に見抜き，またイギリスの社会や文化のこれから進んでゆくべき将来の方向を見通していたということは，Edward Gibbon らの非難や批判を越えて，見落してはならない要点であろう。[26]

Wynkyn de Worde（d. 1534？）は，Caxton の徒弟として恐らく Bruges 時代からいて一緒にイギリスに渡って来たものと思われるが，彼の本名は Jan van Wynkyn であり，Johannes Wynkyn と名乗っていたこともある。[27] 1491年に Caxton が死んだ後，その仕事を引継ぎ Westminster で働らいていたが，1400年代の終りにはロンドンの Fleet Street にある St. Bride's Church の近くの二軒の家を借りて，1501年は大部分を新しい活動の準備のために費やし，Richard Pynson などの同業者らと張合いながら，彼は Caxton の大衆路線をひきつぎ，Pynson が王室印刷人に任命されて法律関係の印刷を主として行ったのに対して，彼は学校の教科書や文法書などの印刷を行った。Wynkyn de Worde は，Caxton ほどの文学的関心もなく，文化や社会の動いてゆく方向を見通す能力もなかったように思われるが，Caxton と同じように，彼自身も翻訳を行い，あるいは編集をして1493年から1500年までの間でも少くとも110種類以上の異った本を印刷出版し（その中には半ピラの印刷も含めて)，事業家としての才能を遺憾なく発揮した。後に聖パウロ寺院の境内（Churchyard）に店を出し，そこには 'Divæ Marie Pietatis' の看板，Fleet 街の方には 'Sun' の看板を出した（Imprinted at London in Fletstrete at the signe of the Sonne by me Wynkyn de Worde)。

さて，Caxton と Wynkyn de Worde の仕事の中で *'Chronicles of England'* の出版記録を見ると，

1480	Caxton
1482	Caxton
1483	Schoolmaster of St. Albans
1485	Machlinea
1493	Gerard Leew (Antwerp)
1497	Wynkyn de Worde
1502	Wynkyn de Worde

1504　Julian Notary

1510　Richard Pynson

1515　Wynkyn de Worde

1515　Julian Notary

1520　Wynkyn de Worde

1528　Wynkyn de Worde

となっている。Westminster の他に，Oxford や St. Albans やその他の町にも既に印刷機械はあったし，St. Albans の僧院は13世紀，14世紀の年代記編纂で著名であったから，*The Chronicles of England* の第 3 版が Schoolmaster of St. Albans の名の下に出版されたのは，自然な事情であったのかもしれない。

因みに，庄司浅水氏は次のように記しておられる。

"ウエストミンスターに次いで，1478年オクスフォードにセオドリック・ロード？の手で，又1480年ロンドンから32キロほど離れた聖アルバンズの町に，無名の人（おそらく一学校教師であろうと云われている）の手で印刷工房が設けられた。15世紀中にイギリス国内で印刷工房の設けられたのはこの 3 ケ所だけで，ウエストミンスターではカクストンやウィンキン・デ・ワードらの手で330点の本が印刷されたが，オクスフォードと聖アルバンズの町では，双方合せて25点の本が印行されたにすぎない。そのうち聖アルバンズでは 8 点の本が印行されている……。][28]

Caxton の死後，外国人の出版印刷業者も増えて来ている。山田昭廣氏の叙述によれば，ベルギー人 William de Machlinia の Holborn 印刷所，Henry Franckenberg の St. Clement's Alley の印刷所，ドイツ人 Wynkyn de Worde の Westminster 印刷所，ノルマン人 Richard Pynson の Strand の印刷所，Julian Notary の St. Thomas Apostle の印刷所などがあった。[29]

M. S. Aurner は Caxton の *Boëthius* に関して，

"One of the most interesting discoveries from bindings was that of Mr. Blades in the St. Albans Grammar School copy of *Boëthius*. In 1858 Mr. Blades found this Caxton in an old cupboard under the drippings of leaky roof. The back, party rotted away, revealed that it was composed of waste sheets from Caxton's press, including sheets from three works previousely unknown. For full account, see Blades : Biog., pp.215—216"

と記しているが，残念ながらこの本はまだ私の管見に入っていない。

N. F. Blake は

"Theodric Rood was printing books in Oxford from c. 1478 to 1485 ; an anonymous printer was active at St. Albans from c. 1479 to 1486 ; and John Letton started printing in London in 1480."

と記し，これらの 3 印刷所は Caxton と異り，外国の書物を出版し大陸のものと大して変らぬ出版内容であったため，そのため Oxford と St. Albans の印刷所は 7 年で閉鎖され，Letton も他の印刷所との合併を余儀なくされた，と語っている。[30]

ところが，ここにひとつの注目すべきことがある。それは The John Rylands Librbry に関しての E. F. Jacob の言及である。

"Among its early *flores* the Rylands possesses three books from a notable provincial, the printer of St. Albans. In re-printing the St. Albans *Chronicles of England* (1497) Wynkyn de Worde called him 'one somtyme scole mayster of Saynt Albons', and as such he is usually known."……"The schoolmaster made the *Brut* the nucleus of his volume of general history, which he divided into seven parts corresponding with the seven periods of history."……"Now to assume that the schoolmaster was himself the compiler——or anthologist——of the earlier part of his *Chronicles,* borrowing from, or working amid, the books of the abbey, would, I think, be hazardous. It is more likely that he took (for this was his method) an existing compilation——he refers to the 'new translation' used by him——to combine with the *Brut,* and this view may find support in his title : 'the Chronicles of England with the fruit of time.' What is the 'fruit of time'? May it not be the translation of a Latin *Fructus temporum* or popular work on the chronology of history, which he found, ready-made, for his use? If this suggestion is correct, there will not be very much to connect the *Chronicles of England* with the great abbey near which it was printed ; and it should be emphasized the *Brut,* at any rate in its continuations, belongs to a non-monastic cycle : the cycle of history written by layman for the laity, drawn upon and copied by historians of the City of London, as the editors of the *Great Chronicle* have recently shown.

It is evident that both the *Chronicles* and the *Boke of St. Albans* were destined for the well-to-do laity, the 'dyverse gentylmen' of whom Caxton speaks ; and perhaps for the literate lady, for she certainly existed generations before *the Boke* was published."[31]

この E. F. Jacob の推理はなかなかに見事であり，興味深い。

註

1) The Book of St. Albans, published in facsimile by William Blades, London, 1906.

2) The Encyclopedia Americana, 1960 参照。しかし私はこのフランス語による部分訳の存在については確認していない。

3) H. Jervis Alfred : The Antiquity of Angling, Darling and Son, London, 1886, によると Barker's Delight ; or, The Art of Angling の初版を1651年としている。I. Walton がその著 The Compleat Angler, 1653 の中に Thomas Barker の上記の本からいろいろ引用していることから考えると，1651年初版説は妥当のように思われる。

4) Bibliotheca Piscatoria, by T. Westwood and T. Satchell, 1883. and The Supplement to Bibliotheca Piscatoria by R. B. Marston, 1901. Reprint edition for Dawsons of Pall Mall, 1966, Originally printed in Great Britain by Peyton Co., Reprinted in Belgium by Fos. Adam, Brussels. によれば，Barnes (*Dame* Julyans).

This present boke shewyth the manere of hawkynge and huntynge : and also of diuysynge of Cote armours. It shewyth also a good matere belongynge to horses : wyth other comendable treatyses. And ferdermore of the blaysynge of armys : as here after it may appere. 〔*Colophon* :〕

Here in this boke afore ben shewed the treatyses perteynynge to hawkynge and huntynge with others dyuers playsaunt materes belongynge vnto noblesse : and also a ryght noble treatise of Cotarmours : as in this present boke it may appere. And here we ende this laste treatyse whyche specyfyeth of blasynge of armys. Enprynted at Westmestre by Wynkyn the worde, the yere of thyncarnacon of our lorde, mcccclxxxxvi. [Westminsster] 1496. fol.

[Black letter ; 74 leaves. On the recto of the first leaf is a woodcut of birds and on the verso a group of men with a hawk. Beneath the latter follows the title. The register commences on the following leaf : a—e in sixes ; f and g in fours ; h, 6 leaves ; a—e in sixes and d, 8 leaves. No pagination or catchwords. The "Treatyse of fysshynge" follows that of "Cote armures" and begins on the verso of g, iv ; it is not in the edition of 1486. The larger device of Wynkyn de Worde is on the last leaf (d viii) which has the device of Caxton on the verso. Copies upon vellum are in the collection of the Earl of Pembroke and in the Grenville Library, British Museum. The Museum has also a copy on paper with the last leaf wanting. Herbert's "Ames," pp 126-33, contains an elaborate account of this book, which is amplified and amended from Herbert's notes and illustrated with facsimiles, in Dibdin's edition, vol. ii., pp. 55-66. Dr. Dibdin mentions a third copy on vellum. There are also copies on paper in the Huth Library and in the Bodleian.

Dame Julyans or Juliana Barnes, Bernes or Berners, to whom these treatises are ascribed, is supposed to have been a daughter of Sir James Berners of Roding Berners in the county of Essex (a favourite of Richard the Second) who was beheaded in 1388. It is said that she was celebrated for her learning and accomplishments and that she held the office of Prioress of the Benedictine Nunnery of Sopwell, near St. Albans, but as far as we can learn, these statements rest on pure conjecture or meagre inference. The first edition of her Book of St. Albans was printed by the school-master printer of St. Albans in 1486.]

② ——— Here begynneth a treatyse of fysshyngee wyth an angle. [*Colophon* :] Here endeth the boke of Fysshynge with other dyuers maters. Imprynted at London, by Wynkyn de Worde, dewellynge in Flete-street, at the sygne of the Sonne. [circa 1500.] 4°.

[Black letter. A to D iv. The woodcut of man angling is under the title. This edition appears to have been published as a "lytyll plaunflet" notwithstanding the caution of the authoress against this course, given in the concluding paragraph of the treatise in previous editions, which in this instance is omitted : "And for by cause that this present treatyse sholde not come to the hondys of eche ydle persone, whyche wolde desire it yf it were enprynted allone by itself, and put in a lytyll plaunflet therfore I haue compylyd it in a greter volume of dyuerse bokys concernynge to gentyll and noble men to the entent that the forsayd ydle persones whyche sholde haue but lytyll mesure in the sayd dysporte of fysshyng sholde not by this meane vtterly dystroye it."

This edition varies the orthography and has some slight corrections of the text and some omissions. The only known copy which was formerly in the Harleian Collection subsequently passed through the hands of Mr. Gulston, Mr. Ratcliffe, Mr. Haworth and Mr. George Wilkinson.]

③ ——— The boke of hawkynge and huntynge and fysshynge. [*Colophon* :] Here endeth the boke of hawkynge huntynge and fysshynge, and with many other dyuer maters. Imprynted in Flete strete ye sygne of ye sonne, by Wynkyn de Worde. [*circa* 1503] 4°.

[Black letter. 46 leaves. A-H in eights and fours alternately, except G, which has six leaves. "Fysshynge" begins on the verso of F i, and has the angler woodcut underneath the title. The catchword throughout the volume is "huntynge." This edition reads "Of Saynt Thomas tyde of Caunterbure." The copy formerly in the possession of Mr. George Daniel and now in the Huth Library, is supposed to be unique. Mr. Daniel considered it to be earlier than the folio of Wynkyn de Worde in 1496. It was sold at his sale in July 1864 for £110.]

④ ——— The booke of hauking hunting and fysshyng, with all the properties and medecynes that

are necessary to be kept. [*Colophon* :] Imprynted at London in Fletestreate at the Sygne of the Rose Garlande, by Wylliam Coplande. (n. d.) 4°.

[Black letter. 48 leaves. A to M in fours. "Fysshynge" begins over woodcut of a man angling. This edition, of which only one perfect copy is known (Lowndes) is described in the "Bibliotheca Anglo-poetica," p. 12. Haworth's sale £4 4s.]

⑤ ——— The booke of hawkyng, huntyng and fysshing, wyth all the properties and medecynes that are necessary to be kepte. [*Colophon* :] Imprinted at London in Saynt Martyns paryshe in ye vinetre upon the thre crane wharfe by Wyllyam Coplande. (n. d.) 4°.

[Black letter. 48 leaves. A-M in fours. "Fysshynge" begins on Ki. Each treatise has a separate but identical colophon. A copy was formely in the possession of Mr. Haslewood. Sold for £8.]

⑥ ——— The booke of hauking huntyng and fysshing, wyth all the properties and medecynes that are necessary to be kept. [*Colophon* :] Imprinted at London in the Ventre, upon the three Crane wharfe, by Wyllyam Copland. (n. d.) 4°.

[Black letter. A to M in fours. 48 leaves. Each treatise has a distinct colophon, without more important variation than "Vyentre" in place of "Ventre" in the first. A copy complete, but with the title mended and last leaf inlaid, was sold by Evans, June 15, 1836, for £6 10s.]

⑦ ——— The Booke of hauking huntyng and fysshing, with all the properties and medecynes that are necessary to be kept. [*Colophons* :] Imprynted at London in Paules churche yerde by Robert Toye ;...in Flete strete at the Signe of the Rose Garland by Wyllyam Copland for Robert Toye ; ...in Flete strete at the Sygne of the Rose Garland by Wyllyam Copland. (n. d.) 4°.

[Black letter. 48 leaves. A. to M in fours. A copy of this edition is in the collection of Earl Spencer. Dent, pt. ii., 1076, £10 10s.]

⑧ ——— The booke of hauking huntyng and fysshyng, with all the properties and medecynes that are necessary to be kept. [*Colophons* :] Imprynted at London in Paules churche yerde by Abraham Vele ; ...in Flete strete at the Signe of the Rose Garland by Wyllyam Copland for Robert Toye ; ...in Paules church yarde at the Sygne of the Lambe by Abraham Vele. (n. d.) 4°.

[Black letter. 48 leaves. A-M in fours. This edition reads (Hi) "Of Saynt Benet the xi of July." An imperfect copy is in the British Museum. Mason £11 16s.]

⑨ ——— The booke of haukyng huntyng and fysshyng, with all the properties and medecynes that are necessary to be kept. [*Colophon* :] Here endeth the booke of Haukyng, huntyng, and Fysshyng, with other dyvers matters. Imprynted at London in Fletestreate at the Sygne of the Rose Garlande, by Wylliam Coplande : for Rychard Tottell. (n. d.) 4°.

[Black letter. 48 leaves. A-M in fours. "Fysshyng" begins on recto of Ki. There is a copy in the Grenville Library, British Museum. Mr. Grenville has appended this note : "This edition is not known to Ames or Herbert, nor has a second copy of it come to my knowledge, though there is one nearly the same printed for Toye and Coplande. There is no date of the year of printing this book, but it appears, from Ames, that Coplande was fined by the Company of Stationers, in 1561, for printing these three tracts. The present edition of Tottell's differs in its colophon at least from those pointed out by Herbert as printed by Coplande, and except the reversed cut before the treatise of fishing, accords exactly with Toye's in its contents." Inglis, 144, £12.]

⑩ ——— [The same title?] *Colophon* : In Lothbury ouer against St. Margeret's Church by Wyllyam Copland. (n. d.) 4°.

[Herbert's "Ames." vol. i. p. 367.]

⑪ ——— The boke of hawkynge, huntynge and fysshynge with all the propertyes and medecynes that are necessarye to be kepte. [*The last Colophon* :] Here endeth the boke of Haukyng, Huntyng, and Fysshyng, with other dyuers mathers. Imprynted at London in Pouls chyrchyarde by me Hery Tab. Finis. (n. d.) 4°.

[Black letter. 46 leaves. A-M in fours with the exception of I which has only two leaves. Each treatise has a distinct Colophon. "Fyshyng" begins Ki. and ends on the verso of Miiij. The only known copy is among Crynes' books in the Bodleian.]

⑫ ——— The boke of hawkynge, huntynge and fysshynge, with all tha propertyes and medecynes that are necessarye to be kepte. [*Colophon*, M, iv. :] Here endeth the boke of Haukyng, Huntyng, and fysshyng, with other dyuers matters. Imprynted at London, in Forster laen, by John Waley. (n. d.) 4°.

[Black letter. 46 leaves. A to M in fours, except I which has only two leaves. Hi reads : "of Saynte Thomas tyde of Canterbure." The "measures of blowyng" are not in this edition, which appears, however, from the position of the second imprint, to be perfect. "Fysshynge" commences on Ki. The treatises have separate but identical colophons. A copy formerly in Mr. Pickering's collection. Haworth 958. £8.]

⑬ ——— The boke of haukyng, huntynge and fysshyng, with all the properties and medecynes that are necessary to be kepte. [*Colophon*, end of fysshyng :] Imprynted at London in Flete Strte at the sygne of [the] George next to saynt Dunstones Church by Wyllyam Powell. (n. d.) 4°.

[Black letter. 48 leaves. A-M in fours. Distinct and different colophons. Hi, reads : "of Saynt Benet the xi. of July." A copy formerly in Mr. Pickering's collection. Haworth, 959, £7 5s.]

⑭ ——— Boke of Haukynge, Huntynge, and Fyshing, with all the Properties and Medecynes that are necessary to be kepte. London by William Powell. (n. d.) 4°.

[Black letter. Lowndes gives this edftion the date (1550) assigned to it conjecturally by Haslewood.]

⑮ ——— Hawking, Hunting and Fishing, with the true measures of Blowing. Newly corrected and amended. At London. Printed by Edward Allde, and are to be solde at the Long Shop adjoyning unto Saint Mildred's Church in the Pultrie. 1586. 4°. 44 leaves.

[Black letter. A copy is preserved in the Phillipps Library, now in the possession of the collector's daughter, Mrs. Fenwick of Thirlestaine House, Cheltenham.]

⑯ ——— Hawking, Hunting and Fishing, with the true measures of Blowing. Newly corrected and amended. At London, printed by Edward Alde, and are to be solde at the Long Shop, adjoining unto Saint Mildred's Church in the Pultry. 1596. 4°.

[Black letter. "This," says Haslewood, "is the last reprint of the selection forming the book of Sir Tristram." The titles and colophons of the sixteen early editions given above are taken from various sources. We can only answer for the accuracy of the first, third, seventh, eighth, ninth, eleventh and fifteenth. For the others (the books themselves being inaccessible to us) we are indebted to Herbert, Haslewood, Pickering, and Russell Smith. We fear that these cannot be accepted without some misgivings : our entry of the edition with the imprint of Hery Tab differs from Haslewood in three places, from Pickering in eight places, and from Russell Smith in thirteen places. It is probable that two or three of these editions were printed from the same 'formes' for different stationers, each having his name attached to his own quota of copies. We cannot, however, specify which are in this position, and our enquiries do not bear out the positive statement on the subject made by a recent bibliographer.]

⑰ ——— The book [of St Albans ;] containing the treatiese of Hawking ; Hunting ; Coat-armour ; Fishing ; and Blasing of Arms. As printed at Westminster, by Wynkyn de Worde ; the year of the Incarnation of our Lord. 1496. London, reprinted by Harding and Wright, for White and Cochrane, and R. Triphook. 1810. Fol.

[150 copies printed. The work consists of "Introduction," 2pp ; "Biographical notices," 16pp ; Bibliographical notices 84pp,. and finally a verbatim, literatim and punctuatim fac-simile of the 2nd edition of "The Boke of St. Albans." A bibliographical labour carefully and conscientiously

executed by Mr. Joseph Haslewood. A few copies of this Introduction were published separately.]

⑱ ——— The Treatyse of Fysshynge wyth an Angle. Attributed to Dame Juliana Berners, reprinted from the book of St. Albans. London, Pickering, 1827. 8°.

[Printed with Baskerville's type.]

⑲ ——— The Treatyse of Fysshynge wyth an Angle. By Dame Juliana Berners : being a fac-simile reproduction of the first book on the subject of fishing printed in England by Wynkyn de Worde at Westminster in 1496. With an introduction by Rev. M. G. Watkins, M. A. London, Elliot Stock, 1880. fol.

[One of the best facsimiles ever executed.]

⑳ ——— An American edition of the Treatyse of Fysshynge with an Angle from the Boke of St. Albans. (Reprinted...from the edition, London...1827) Edited by G. W. Van Siclen. (Glossary.) New York, 1875. 12°.

㉑ ——— An Older Form of the Treatyse of Fysshynge Wyth an Angle. Ed. by Thos. Satchell. (a) 8 vo. 400 copies only. printed for presentation ..... W. Satchell, 1883 ; (b). 4 to. 200 copies only printed. Large paper ..... W. Satchell, 1883.

上記21種類の版本中，私が所有し参考したものは⑱⑳㉑-a，及び

A Treatise on Fishing with a Hook, attributed to Dame Juliana Berners, printed in the Book of Saint Albans by Wynken de Worde. Mcccclxxxxvi, and rendered into Modern English by William Van Wyck, Mcmxxxiii, の4冊である。

5) Geo. W. Van Siclen : An American Edition of The Treatyse of Fysshynge wyth an Angle, 1875.

6) Thomas Satchell ; An older Form, i-ii, 1883.

7) ibid., i-ii.

8) Joseph Haslewood の結論を DNB を通して見る限りにおいては，必ずしも従来の疑問点を解決しているようには思えない。

9) 定本，庄司浅水著作集　書誌篇　第1巻，世界の古本屋，p.28-36，出版ニュース社，昭54. 9. 20。

10) E. F. Jacob : The Book of St. Albans., The John Rylands Library, Manchester, Bulletin, No. 28, 1944, Kraus Reprint. Germany, 1967.

11) Thomas Satchell, op. cit., ii.

12) 例えば，イギリスの著名な随筆家 R. B. Marston は次のように記している。

"Inasmuch as nothing of the kind preceded it, and all later works are in some measure indebted to it, either for form or matter. The Treatyse of Fysshynge wyth an Angle, attributed to Dame Juliana Berners, must be accounted one of the most interesting, if not the most interesting, of books on angling in English language"

R. B. Marston : "Walton and some earlier writers on Fish and Fishing", 1894, p.10.

また，A. Gingrich は，"Dame Juliana Berners is to angling literature as Chaucer is to English literature, representing to all practical intents and purposes the very beginning. Of course they both had predecessors, but it's something of a feat of scholarship to figure out what they're saying, once you've gone to the trouble of looking them up". Arnold Gingrich : The Fishing in Print, A Guided Tour Throngh Five Centuries of Angling Literature, Winchester Press, 1974, p.9.

13) T. Westwood & T. Satchell : Bibliotheca Piscatoria ibid., p.25.

14) A. L. Binns : A Manuscript Source of the Book of St. Albans, The John Rylands Library, 1950. vol.33, No.1, p.22.

15) A. E. Jacob : The Book of St. Albans, The John Rylands Library, 10th of March, 1943, p.102—3.

16) A. L. Binns : op. cit., p.22.

17) Arnold Gingrich, op. cit., p.13, p.9 など参照。

18) アイリーン・パウア『中世の女たち』M. M. ポスタン編集，思索社，昭和52年，p.139—140。G.

M. トレヴェリアン（林健太郎訳）『英国社会史』上巻（昭和24年），中巻（昭和25年），山川出版社，p.1148, Power とは少し内容が異る。

19) アイリーン・パウア：前出 p.153—154，他。E. E. Power : Medieval English Nunneries, Cambridge, 1922, p.140, p.117.

20) Geo. W. Van Siclen, op. cit., p.14.

21) The Arte of Angling, 1577 に関しては，拙訳『釣魚道』岳洋社，昭和54年，及びその解説を参照されたい。また「William Samuel と Izaak Walton」同志社女子大学学術研究年報，第28巻（1977）も参照されたい。

22) J. Nordström.

23) G. M. トレヴェリアン『英国社会史』p.132。

24) N. S. Aurner : Caxton-Mirrour of Fifteenth Century Letters, 1965, Russell and Russell, p.212 ff.

25) ibid., p.48 ff.

26) N. F. Blake : Caxton and his World, 1969, Andre Deutsch, p.208 ff.

27) N. S. Aurner, op. cit., p.36, Blades によれば彼は15以上の名を名乗っていたらしい。

28) 庄司浅水：前出書 p.31—32。

29) 山田昭廣『本とシェークスピア時代』，東大出版会，1979. 11. 30，p.132—3。

30) N. F. Blake, op. cit.,

31) E. F. Jacob, op. cit., p.100—102.

原稿受理　1985年4月9日